

萩にあしあと残そうよ

「萩の休日は、健康体を活かして。」

令和2年(2020)
12月1日発行
—第16号—
発行：大塚好一



昔の宿場で出会った菊花たち。

「日々の暮らし」

師走に入ると、日の出時刻が七時過ぎになります。起き出す頃はまだ真つ暗で、些細なことですが萩暮らしを実感します。そろそろ冬用タイヤに交換しなければ…。

さて、先月後半から出勤が週二日に増えました。ペースはゆっくりですが、得意先や新規取引先へ連絡や訪問をしています。しかし、新型コロナウイルス感染が再燃しているのも、まだ先は見通せないです。

日々の暮らしは順調です。

休日(週末)に予定を立てて登山やイベントなどに出かけています。今の環境でできることに積極的に取り組む姿勢がとて強くなりました。

「あしあとノート」

◆霧の三瓶山に登頂◆

登山にも少々興味があり、萩を拠点に山登りをしたいと思っています。このほど、島根県大田市の三瓶山(さんべさん)を目指しました。あいにく小雨と霧という条件でしたので、カップを着て、眺望はお預けでした。

三瓶は男三瓶を主峰に、子三瓶、女三瓶、孫三瓶などが環状に並ぶ鐘状火山群で、ぐるりとお鉢めぐりすることができます。来春に、ぜひチャレンジしようと思っています。今回は久々に山中に一人、山に抱かれる心地よさを感じた登山でした。



男三瓶山頂
標高 1,126m

◆十種ヶ峰の視界良好◆



南東方向から見た十種ヶ峰。

県内の名峰のひとつ十種ヶ峰(とくさがみね)は、以前から凛々しい山容に魅力を感じていた山です。霧の三瓶から一週間後、天気は絶好の登山日和となり、迷わず山頂を目指すことにしました。山頂近くまで自動車で行くこともできますが、ラクチン登山では物足りません。とはいえ、麓から歩いて一時間ほどで登頂しましたが…。

どこまでも青い空、独立峰ならではの眺望の良さは格別でした。山頂で出会った人との会話が弾むはず。



山頂は標高 988.6m、
山口・島根県境にそびえます。

◆萩城跡御城印を入手◆

御朱印ならぬ御城印が流行っているそうで、このほど萩城跡においても販売が始まりました。残念ながら発売当日には行けませんでした。その後の後しかと入手しました。

萩城は、関ヶ原の戦いに敗れた毛利輝元公が、領地を八か国から二か国に減らされたことにより築いた城です。輝元公は慶長九年(一六〇四)に入城しました。その日にちなみ、御城印は一月一日に発売となりました。

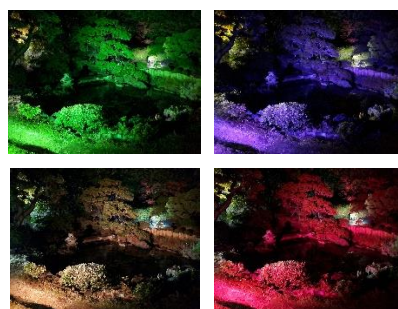
◆日本酒のイベント◆

萩市と阿武町の六軒の酒蔵の日本酒の飲み比べイベント「やっぱ萩の地酒でNight!」が、田町商店街のアーケード下で開催されました。今年で三回目です。

昨年の記憶もあって楽しみにしていたので、無事開催されてほっとしました。もちろん、受付での検温や、渡されたフェイスシールドの着用など、時世ならではのルールはありましたが、もともと屋外ということもあり、安心して楽しむことができました。

◆花南理の庭ライトアップ◆

仕事がつきかけで親しくなった馬屋原(まやはら)さんがご自宅で営む茶寮「花南理(はななり)」の庭は、見事な日本庭園が魅力のひとつです。そこに、青・赤・緑色のカラーライトが設置され、このほど庭園ライトアップが披露目されました。



左下が一般的なライトアップ。

馬屋原さんは、茶寮を改装して一日一組の民泊を始めるため、昨年クラウドファンディングでの資金集めに成功しましたが、直後に新型コロナウイルスの騒ぎとなり、工事は未着手の状態です。応援者の一人として、このライトアップが生かせる日が来ることを待ち望んでいます。ちなみに、敷地内のミニ美術館には驚くお宝も展示されています。

◆ 幻想的な雲海・津和野 ◆

十月三〇日には見られなかった津和野の雲海。十一月一日の朝、早起きで出かけ、見る事ができました。この日はかなり条件が良かったらしく、津和野盆地が濃い霧に長時間覆われて、異なる二か所からの眺めを堪能：一度ダメなら二度三度が叶う“今”を楽しんでいます。



津和野城跡からの眺め。津和野の町並みがすっぽりと雲海に包まれています。



国道9号沿いからの眺め。津和野城の石垣が見えます。

◆ 秋吉台の秋景色 ◆



萩でできた友人の勧めでインスタグラム (Instagram) を始めました。フェイスブック (Facebook) と違って、まったく無関係だった人と繋がることには、興味さえ持っていなかったのが驚きました。しかし、秋吉台のススキを伝える投稿と出会い心動かされ、車を走らせたのですから分らないものです。ぽっかりと島のように見える黒い部分は「長者ヶ森」といいます。

◆ 広報はぎデビュー? ◆

萩市民秋季ソフトボール大会の記事が、広報はぎ一二月号に掲載されました。



〔自由気ままな歌日記〕

ラジオから月と金星並べると聞いて見上げる東雲の空
(十一月一三日)

夕飯を終えると長い夜になりラジオがひとり語り続ける
(十一月一七日)

封解けば香り懐かし山椒の便り嬉しや佃煮届く
(十一月一九日)

帰省予定無しと告げれば父の声僅かに沈む
電話越しにも

寒い夜に
五キロ歩くも苦にならぬ
地酒味わう催しのあと
(十一月二八日)

〔よのみち雑話〕

『短歌創作ノートのこと』

令和二年十月三〇日、歌人斎藤茂吉の世界を知ったことから詠みはじめた自己流の短歌を書き記す創作ノートが、四年四か月ほどかかりいっばいになりました。

創作にあたってのノルマは設定していないので、作る時は集中して幾首も、浮かばない時はしばらく詠まないという気ままなノートですが、ついに最終ページまで到達したのです。胸を張って言えることではありませんが、確かに継続してきた証拠です。といっても、実は最初のページは空けておきました。そこで、ノートを使い切った感想を記したので転載させていただきます。



創作ノート
A5サイズ、60ページ

群馬県の母の実家訪問から始まった創作ノートの第一弾は、四年四か月を経て最終ページに辿り着いた。当初は斎藤茂吉の万葉調を意識し、知識もないのに旧かなづかいを積極的に試みているけれど、やはり全体的に無理がある作が多いようだ。山口県に移り住み、人に見

せるようになってからは(萩にあしあと残そうよに掲載開始)、恩師長嶋先生のアドバイス(感想)を受けて、等身大の現代かなづかいで表現する方針に変えた。時おり格好つけの言葉を使用するのは愛嬌ということ。

ただし、創作にあたっては「写生道」には程遠いものの目の前の事実・現実を観察することを柱にしている。萩に―に「自由気ままな歌日記」とし、作品というよりは日記とすることで、自由かつ自然体の歌が並ぶようになった気はしている。今後、指導を仰ぐこともあるかもしれないけれど、当面は自己流の三文字詩を楽しんでいきたい。

ウム。このノート内に埋もれている歌も拾い上げて整理すべきだ。「やがて」や「いつか」はなかなか来ないだろうから、一冊を終えた今が取り組むチャンスなのだろう。

さて、二冊目の始まりは前出の「ラジオから」です。これから先、どんな歌日記が記されていくのか、私自身が楽しみにしています。